

価値志向的精神作用尺度の作成

酒井 恵子¹ 久野 雅樹²

CONSTRUCTION OF VALUE-INTENDING MENTAL ACT SCALE

Keiko SAKAI AND Masaki HISANO

The purpose of this study is to construct a scale to measure value-intending mental acts, characterized by six types of values (theoretical, economic, aesthetic, religious, social, political) originally proposed by Spranger (1921). A typical test based on Spranger's classification of values, i.e., "Study of Values" (Allport et al., 1951), relates only the socio-cultural objects to which individuals feel the value, without treating the way in which individuals feel the value. Our scale is made to measure the latter subjective experience ("mental act") itself. Basing upon personal interviews and preliminary survey, 54 items (6 mental acts x 9 items) are selected and administered to 493 college students (292 male and 201 female). With factor analysis, six subscales are extracted from those items to construct a Value-Intending Mental Act Scale. Relations of this scale, focused on subjective mental process of valuation, with preference between school subjects and vocational interest, are regarded as objective manifestations of the subjective processes making the object of a discussion.

Key words : Spranger (Eduard), values, mental acts, school subjects, vocational interests.

問題と目的

価値への志向性は行動の力学の核心であり、人格の統一に大きな役割を果たす (Allport, 1937)。心を価値へと向かう目的論的構造として捉え、個々の認知・情動等を、その彼方に立てられた価値との関係において理解することは、多面的な心的活動を統合的に把握する上で有用である。

価値を測定する尺度としては、Spranger (1921) の価値類型論に基づき Vernon & Allport (1931), Allport, Vernon & Lindzey (1951) らが作成した "Study of Values" (オールポート・ヴァーノンテスト) が最も著名で長期にわたり活用され、価値研究に大きな影響を与えてきた (塚田, 1980)。最近のわが国の研究でも、この尺度

の邦訳版 (津留・秋葉・原谷・野辺地・関・八重島, 1975) を用いた追試調査 (伊藤・瀧野・白井・秋葉・鳥山・曾我・栃尾・中村・橋本, 1995) 等がある。しかしながら "Study of Values" は、Spranger (1921) の提唱する 6 種の普遍的価値 (理論・経済・美・宗教・社会・権力) を、6 つの文化社会領域 (学問・経済・芸術・宗教・福祉・政治) にほぼ対応づけ、どの領域への興味関心が優位であるかを測定しており、"理論的=学者型" "美的=芸術家型" 等、ややステレオタイプのな類型化につながりやすい面がある。

Spranger (1921) は 6 価値を志向する心的活動をそれぞれ "理論的精神作用" 等と呼ぶが、各精神作用は必ずしも特定の文化社会領域に対応づけられてはいない。6 精神作用の内容をごく簡単に示すと、以下のようなになる。理論：認識し抽象化し体系化する。経済：損失を抑え効率よく利益を得る。美：印象を表現へと形成する。宗教：自己と世界との関係において生の全体的

¹ 東京大学 (Graduate School of Education, University of Tokyo)

² 電気通信大学 (University of Electro-Communications)

意義を追求する。社会：他者を愛し共感し献身する。権力：他者より優位に立ち指導・支配する。以上の6精神作用はいずれも、特定の対象・状況に限らず、日常の精神活動全般に広く見られる、基本的に根底的な作用と言える。Spranger (1921) によれば、例えばある人が指輪を手にかけている状況1つをとっても、“輝いている(美的)” “金でできている(理論的)” “貴重なものである(経済的)” “私の母から貰った(社会的)” 等、6精神作用のいずれも生じ得るし、6価値全てが体験され得るという。ただし、例えば殆どの人が理論的価値を見出すような対象が存在したり、あるいはまた、どんな対象においてもまず理論的価値を見出すような個人が存在するということはあり得よう。こうして主体が主観的に体験する“価値”とは即ち、主体が対象に付与する“意味(意義) Sinn”に他ならない(Spranger, 1921)。

本研究ではSprangerのモデルを、興味関心の対象(価値対象)の個人差ではなく、対象にいかなる意義を付与し、いかなる価値を体験するかという、主観的価値体験の個人差を表わすモデルと捉え、6種の価値志向性ないし意義付与傾向を測定する尺度(“価値志向的精神作用尺度”)を作成することを第1の目的とする。もしこのような主観的・内面的価値体験が測定できたならば、これと、より客観的・外在的な価値対象の諸指標との関連をあらためて検討することにより、“学問=理論的” “芸術=美的” 等の図式を超えて、ある対象に興味関心を持つことがいかなる価値志向性と関係し、いかなる心理的意義を持つのか、実際のデータに即して確かめることができよう。さらに、人がどのような主観的価値づけ・意義づけを経て特定の対象を選好するに至るのか、そのプロセス・背景についても示唆が得られ、Sprangerのモデルを、単なるステレオタイプでなく、心的過程を力動的に記述するモデルとして活用する道がひらけよう。またこれに付随して、今回作成する尺度と他の諸指標との間に意味ある関連が見られた場合には、間接的に尺度の妥当性を示唆することにもなろう。以上の観点から本研究では、価値対象の指標として“学校教科の好み”と“職業興味”を取り上げ、これらと“価値志向的精神作用尺度”との関連を検討することを第2の目的とする。

かつてHoward (1985) は、心理学研究において研究者自身の価値や信念が研究結果に大きな影響を及ぼすことを指摘したが、本研究のように主観的価値づけ・意義づけの個人差を扱う場合には、研究者の主観性の問題には特別な注意を払う必要がある。例えば、研究

者自身にとって理解・共感し難い価値については、そもそも適切な項目を作成し測定にのせること自体が困難と思われる(酒井, 1995b)。それ故にこそ研究者には、一般に何が価値であり得るか・あるべきかという規範的意識に則り、自己の了解の及ぶ範囲を常に拡大する努力が求められ、Sprangerの6価値のような古典的枠組みに立ち返ることの意義もそこにあると言えよう。

主観性に制約された研究者が、被験者の主観的価値体験を理解しようとする場合、個々の体験を断片的に切り取って分析するのみでは、研究者の側の恣意的な解釈・価値づけが入り込む危険が大きい。個々の体験は、その基盤となる体験者の意味世界・意義連関の全体との関係においてはじめて意味をなすが、そのような“全体”を他者が完全に把握することはまず不可能である。従って、体験中心たる当の被験者にも解釈のプロセスに参加してもらうことが望ましい。例えばHermans(1987)は、自己Selfを価値づけのシステムとして捉える立場から、被験者の過去・現在・未来において特に重要な事柄は何か、どのような意味で重要なのか、その事柄は体験全体の中でどのような位置を占めているか等について、被験者と研究者との対話を通じて解明していく手法(Self-Confrontation Method)を提案している。本研究においても、被験者との対話を通じ、6精神作用とは主観的にはいかなる体験であるのかを了解することから出発し、体験者自身の実感に即した、的確で平易な表現からなる尺度項目を作成することを目指す。

研究1：価値志向的精神作用尺度の作成

目 的

6精神作用を測るものとして概念的に妥当で、かつ体験主体の実感に即した、的確で平易な項目表現からなる尺度を作成する。

方 法

6精神作用に関する概念的検討 まずSpranger(1921)の記述を分析検討し、6精神作用の要点を抽出・整理した。次に、われわれの日常的な心的生活において6精神作用に相当するような現象が実際に見られるかどうか、また、見られるとすれば具体的にどのような経験として、どのような言葉で表現されるのかを探るため、大学生・大学院生36名を対象に半構造的な面接調査を行った。面接での質問項目は、興味関心・対人関係・生育史・自己像等に関するものであり(所用時間1時間~1時間半程度)、最後に上記で整理した6精神作用の内容を類型的にまとめた文章を被験者に提示し、自

分がそれらにどの程度当てはまると思うか(自己評価)、6精神作用または6類型それぞれについてどのように思うか(好き/嫌い, イメージできる/できない等)を尋ねた。そして被験者の自己評価を参考にしつつ、面接記録の中から6精神作用に相当すると思われる発言を抽出し、面接記録全体との兼ね合いから、それらの発言をSprangerの言う6精神作用の具体例として解釈することが妥当であるかどうか、個々の発言、個々の被験者について吟味した。また、各被験者において顕著な精神作用、重視されている精神作用、類似的あるいは対立的に捉えられている精神作用対、目的手段関係にあるものとして捉えられている精神作用対等、6精神作用の枠組みを用いて各被験者の体験世界を記述することを試み、この作業を通じて、6精神作用各々の本質とその相互的關係について、さらに検討を加えた。

第一次質問紙調査 以上の概念的検討を踏まえて、6精神作用の本質的特徴をなるべく端的に、具体的に、分かりやすくまとめて項目化し、さらに面接調査において各精神作用が特に顕著に認められ、本人もそのように自認する被験者(各精神作用毎に2~3人ずつ)に依頼して項目に関する助言を求め、より実感に即した自然なワーディングになるよう改善を加え、各精神作用12項目ずつ、計72項目からなる“質問紙1”を作成した(酒井, 1995a)。これを大学生・大学院生414名に実施し、項目間の相関関係を分析することを通じて、6精神作用それぞれの持つ独自の本質を的確にバランスよく捉えた項目群になるよう、項目の内容およびワーディングに修正を施した(酒井, 1995b)。

第二次質問紙調査 以上の手続を経て作成された54項目(6精神作用×9項目)からなる“質問紙2”を大学生493名(男子292名, 女子201名)に実施し、5件法により回答を求めた。

結果と考察

因子分析 “質問紙2”の54項目について、まず項目間の相関関係を見たところ、“12.リーダーシップのある方だ”と“54.グループの中心になって、他の人を引っばっていかうとする方だ”(いずれも“権力”の項目として作成)の相関が.82と高かったため(他は全て.60未満)、前者を削除した。残る53項目について主因子法による因子分析を行い、因子数を2から順次増やし、最終的に予想される因子数が6とやや多いことに配慮し、各因子への寄与が均等になるようエカマックス回転を施した。その結果、固有値が1以上の因子は第7因子までであり、第7因子と第8因子の固有値の大きさに落差があり、さらに、6因子解よりも7因子解の方が解釈

が容易であったことから、7因子解を採用した。第1~第6因子は、項目作成時に想定した6精神作用の分類にほぼ相当する因子と解釈された。第7因子は、“43.便利で使いやすそうな道具を見つけると、ぜひ手に入れたと思う”“45.興味のある分野のことは、こまかいことまでよく知っている”“31.実現しそうないいことについて手を出して、失敗することが多い”等の項目からなるが、全体に因子負荷が低めであること、また、内容的には物事へのこだわり・執着を表わす因子と解釈できるものの、いかなる価値に関するこだわり・執着であるかという一貫した方向性が見られず、価値志向性というよりはむしろ“気質”的なものを反映している因子と思われたことから、これを第七の精神作用として新たに取り上げることはしなかった³。従って第7因子に属する7項目は削除し、残りの6因子について、構造をすっきりさせるため、まず当該因子の負荷が低い項目(.35未満)を除き、次に複数の因子にまたがっている項目(他の因子とも.35以上の負荷があるものおよび.35未満であっても、当該因子の負荷との差が.10未満と小さいもの)を除いた。例えば、当初“美”の項目として作成した項目のうち、“8.小説や詩など、文学に関心がある”“44.自分の気持ちや感じを表わすのにぴったりの言葉を見つけようとする”の2項目は、第5因子(美)と第3因子(宗教)にまたがっていたため削除された。残った38項目のうち、第6因子(経済)に属する項目数が4と少なかったため、上で一旦除いた第7因子の項目のうち、第6因子の負荷が相対的に高かった“31.実現しそうないいことについて手を出して、失敗することが多い”を残すこととした。以上の手続を経て選ばれた39項目について、再度主因子解を求めエカマックス回転を施し、最終的にTABLE1のような6因子解を得た。第1因子は理論的精神作用、第2因子は社会的な精神作用、第3因子は宗教的精神作用、第4因子は権力的な精神作用、第5因子は美的な精神作用、第6因子は経済的精神作用に相当する因子と解釈した。

尺度の作成 TABLE1の因子分析結果に従って39項目を分類し、6精神作用を測定する6下位尺度を構成し、各下位尺度の項目得点の総和を項目数で除いたものを尺度得点(1~5点)とした。各下位尺度の項目数、尺度得点の平均値と標準偏差、並びに α 係数をTABLE2に示す。また、6下位尺度間の相関係数をTABLE3に示す。“経済”の α 係数がやや低く(.61),

³ 本研究の“質問紙2”の54項目を改良して作成した“質問紙3”の72項目(未発表)については、理論通りの6因子解が得られている。

“美”と“社会”の尺度間相関が高めである(.39)等の問題はあるものの、全体として、当面の使用にたえる程度の収束妥当性ならびに弁別妥当性を備えていると

思われる。以上の手続により、6下位尺度からなる“価値志向的精神作用尺度”が作成された。

TABLE 1 因子分析結果

項 目 内 容	I	II	III	IV	V	VI	h ²
27. 何か変わったことに気づくと、その原因や理由をつきとめたくなる。(理 ⁺)	.70	.17	.12	.13	.10	-.10	.57
21. ものの仕組みがどうなっているのか、興味をもつ方だ。(理 ⁺)	.70	.12	.04	.02	.04	-.08	.51
3. 「これは何だろう」「なぜこうなるのだろう」という疑問をもつ。(理 ⁺)	.63	.07	.13	.17	.11	-.02	.46
51. 複雑なものの中から、法則やパターンを見つけたすのが好きだ。(理 ⁺)	.49	-.03	.10	.10	.02	.00	.26
9. 辞書や事典を引いたり、図鑑で調べたりするのは好きな方だ。(理 ⁺)	.45	.09	.02	.24	.19	-.05	.31
39. 試験勉強等では丸暗記は避け、「なぜそうなるのか」という理由から理解する。(理 ⁺)	.45	.08	.10	.08	.03	.04	.22
15. すじみち立ててものを考えることは苦手な方だ。(理 ⁻)	-.43	.01	-.19	.09	-.03	-.24	.29
33. 何か疑問を感じても、わざわざ調べたり確かめたりすることは少ない。(理 ⁻)	-.62	-.07	-.06	-.12	-.11	-.10	-.44
47. 相手の話をよく聞いて、気持ちを受けとめようとする方だ。(社 ⁺)	.08	.52	.06	.12	.10	.17	.34
29. 誰かが困っているのを見たら、すすんで手助けする。(社 ⁺)	.13	.52	.22	.11	.17	.03	.38
11. 家族や友人に対する愛情が深い方だ。(社 ⁺)	-.03	.52	.13	.02	.29	.14	.39
41. 人の生き方を見て、「えらいなあ」「すてきななあ」と感心することが多い。(社 ⁺)	.01	.50	-.11	.15	.18	.01	.32
23. 仲間と力を合わせて、1つの目標に向かってがんばるのが好きだ。(社 ⁺)	.04	.45	.16	.06	.05	.08	.24
53. 親しい相手が喜んでくれるなら、何でもしてあげたいと思う。(社 ⁺)	.15	.43	.01	.24	.18	-.04	.30
17. 人づきあいは、あまり楽しいと思わない。(社 ⁻)	.03	-.47	-.25	.17	-.16	.08	.34
35. 他人のことを、深く理解したいとは思わない。(社 ⁻)	-.12	-.56	-.07	-.15	-.08	.01	.36
6. 他人に対して、自分の意見をはっきり言う方だ。(権 ⁺)	.05	.04	.71	-.06	.15	.02	.54
54. グループの中心になって、他の人を引っばっていこうとする方だ。(権 ⁺)	.06	.28	.62	.10	.09	.14	.51
48. まちがったことをしている人を見たら、きちんと注意する。(権 ⁺)	.17	.29	.48	.01	.04	.10	.35
24. 自分が正しいと思うことなら、反対する人を説得してでもやり通す。(権 ⁺)	.18	-.01	.46	.11	-.02	.09	.27
36. 人の意見に左右されやすい。(権 ⁻)	-.24	.22	-.42	-.02	-.09	-.18	.32
18. 人にもものを頼んだり、自分の要求を伝えたりするのが苦手だ。(権 ⁻)	.06	-.14	-.55	.23	-.11	.02	.39
4. 自分が生まれてきたことの意味について考えることがある。(宗 ⁺)	.20	.03	-.02	.60	.03	-.03	.41
52. 自分はどのように生きるべきかと、悩むことがある。(宗 ⁺)	.05	.11	-.15	.54	.02	-.10	.33
28. 人間の運命というものを感じることもある。(宗 ⁺)	-.01	.17	.07	.53	.10	.02	.33
46. 自分が生まれる前や死んだあとのことについて考えることがある。(宗 ⁺)	.04	.02	-.01	.49	.06	.04	.25
10. この世界には、人間の知恵の及ばない、大きな力がはたらいていると思う。(宗 ⁺)	.03	.05	.04	.39	.08	-.02	.17
16. 宗教や信仰に対しては、関心がない方だ。(宗 ⁻)	-.19	-.07	.01	-.32	-.12	.01	.16
2. きれいなものを集めたり飾ったりすることが好きだ。(美 ⁺)	.07	.11	.09	.03	.57	.09	.36
50. 自分がふだん使うものは、色やデザインにこだわる方だ。(美 ⁺)	.02	.05	.07	.07	.54	.04	.31
26. 身のまわりの物の形や色に、強く心を引きつけられることがある。(美 ⁺)	.21	.12	.03	.18	.52	-.12	.38
38. 音楽が好きな方だ。(美 ⁺)	-.06	.07	.11	-.03	.44	.05	.22
32. 美しい景色を見ても、すぐに飽きてしまう方だ。(美 ⁻)	-.09	-.23	.07	-.09	-.41	-.06	.24
14. 芸術的なものには、あまり興味がない。(美 ⁻)	-.13	-.12	-.10	-.14	-.57	.07	.39
1. 人よりも計画性がある方だ。(経 ⁺)	.02	.01	.11	-.03	.09	.61	.40
49. どうせやらずにはならない雑用は、早めに片付けてしまう。(経 ⁺)	-.04	-.02	.05	.03	.01	.60	.36
37. 10分や20分の空き時間・待ち時間も、なるべく有効に使う。(経 ⁺)	.08	.08	.17	.12	.03	.43	.24
31. 実現しそうなことについて手を出して、失敗することが多い。(経 ⁻)	.10	.03	.14	.24	.01	-.29	.17
13. 決められた期限までに仕事を間に合わせるのが苦手だ。(経 ⁻)	.01	-.12	.01	.09	.05	-.54	.32
二 乗 和	2.96	2.46	2.21	1.97	1.96	1.57	

注 項目文頭の1.~54.の数字は、質問紙における項目番号を示す。項目文末尾に付した記号は、その項目がどの精神作用を測るものとして作成されたかを示す(例えば(理⁻)とは、理論的精神作用の逆転項目として作成されたことを示す)。

TABLE 2 価値志向的精神作用尺度の6下位尺度の項目数, 平均値, 標準偏差, α 係数

下位尺度	項目数	平均値	標準偏差	α 係数
理論的精神作用	8	3.44	0.73	.79
経済的精神作用	5	3.03	0.79	.61
美的精神作用	6	3.68	0.73	.70
宗教的精神作用	6	3.27	0.80	.66
社会的精神作用	8	3.69	0.65	.76
権力的精神作用	6	2.81	0.75	.74

TABLE 3 6下位尺度間の相関係数

	経済	美	宗教	社会	権力
理論	.02	.25**	.27**	.25**	.28**
経済		.03	-.06	.09	.16**
美			.23**	.39**	.21**
宗教				.24**	.02
社会					.28**

* $p < .01$ ** $p < .001$

研究2：価値志向的精神作用と、教科の好み・職業興味との関連

目的

“価値志向的精神作用尺度”を用いて、様々な対象への興味関心が、いかなる主観的価値づけ・意味づけと関わっているかを探る。

方法

研究1の“第二次質問紙調査”の被験者493名の中から、(a)256名(男子136名, 女子120名)について“中学・高校時代の教科の好み”を併せて尋ね、英語・数学・国語・理科・社会科・音楽・美術・体育の8教科について、“5 好き”～“1 嫌い”の5件法により回答を求めた。さらに、(b)121名(男子116名, 女子5名)⁴について、VPI 職業興味検査(日本労働研究機構, 1985)を追加実施した。

結果と考察

(a)教科の好みとの相関係数を TABLE 4 に、(b) VPI の6つの“職業興味領域”尺度(現実的/研究的/社会的/慣習的/企業的/芸術的)並びに5つの“心理的傾向”尺

⁴ VPI を実施した121名は全て工業大生であり、その殆どが男子である(121名中, 男子116名, 女子5名)。全被験者493名のうち、工業大生137名と、それ以外の356名との2群について、6精神作用の平均値をt検定(5%水準)により比較したところ、工業大生は“経済”が高く“美”“宗教”“社会”が低いとの結果であった。また、全被験者中、男子(292名)は女子(201名)よりも“美”“宗教”“社会”が低いとの結果が得られている。

度(自己統制傾向/男性・女性傾向/地位志向傾向/稀有反応傾向/黙従反応傾向)との相関係数を TABLE 5 に示す。なお VPI に関しては、上記のような下位尺度単位の分析の他、160項目(職業名)それぞれについて、興味関心が“ある”=1点, “ない”=-1点, “どちらとも言えない”=0点を与え、個々の職業への興味関心と6精神作用との相関係数を併せて求め、尺度間の相関関係を解釈する際に参考にした。TABLE 4, 5 の中から、主に.25以上の相関関係に着目し解釈した結果を、以下、6精神作用毎に整理して示す。

“理論”について 教科では理科と、職業興味では“研究的領域”(例えば“人類学者”(“理論”との相関.31), “科学評論家”(31))と相関が見られた。“理論”の尺度項目のうち、特に理科と相関がある項目(.25以上)は21, 51, 3, 39(内容についてはTABLE 1参照)、“研究的領域”と相関があるのは9, 27, 33であった。理論的な志向性は、法則性やメカニズムへの関心故に理科的興味に結びつき、疑問を解決しようとする意欲を通じて研究的職業興味に結びつくと解釈できる。

TABLE 4 6精神作用と教科の好みとの相関係数

	英語	数学	国語	理科	社会科	音楽	美術	体育
理論	.08	.21*	.13*	.36**	.02	.18*	.13*	.05
経済	.04	.02	-.00	-.05	.04	.11	-.12*	.09
美	.23**	-.15*	.14*	.06	.04	.33**	.43**	-.06
宗教	.14*	-.04	.19*	.08	.20*	.11	.07	-.07
社会	.18*	.07	-.02	.13*	.14*	.32**	.18*	.16*
権力	.10	.03	.05	.10	.04	.13*	.14*	.10

* $p < .05$ * $p < .01$ ** $p < .001$ **TABLE 5** 6精神作用と VPI 職業興味検査との相関係数

	職業興味領域						心理的傾向				
	現実的領域	研究的領域	社会的領域	慣習的領域	企業的領域	芸術的領域	自己統制	男性・女性	地位志向	稀有反応	黙従反応
理論	.23*	.32**	.11	.08	.11	.19*	-.16	.09	.06	-.06	.23*
経済	.07	.11	.11	.19*	.11	-.10	-.06	-.12	-.13	.15	.13
美	.12	.16	.16	.04	.21*	.27*	-.05	-.06	.00	-.19*	.19*
宗教	.14	.17	.10	.12	.10	.29*	-.13	.05	.01	-.09	.25*
社会	.11	.20*	.25*	.11	.27*	.08	-.15	-.08	.02	-.11	.31**
権力	.13	.22*	.37**	.19*	.32**	.21*	-.07	-.05	.01	-.14	.30*

* $p < .05$ * $p < .01$ ** $p < .001$

“経済”について 教科の好み・職業興味のいずれとも明確な関連は見られず、VPIの“慣習的領域”と.19の相関が見られたのが最高であった。今回作成した“経済”の尺度は、高次の精神作用というよりは、むしろ生活習慣のレベル（計画性・勤勉さ等）を主に問うものになっていることが、このような結果を生んだ可能性もある。参考までに、“慣習的領域”の中で“経済”との相関が相対的に高い職業は、“銀行監査係”(.25)、“簿記事務員”(.24)等であり、“慣習的領域”以外で相関が高いのは“郵便配達員”(.30)である。物事を一定の方式で処理するこれらの仕事は一見単調にも思われるが、“経済的人間の理想的目標は、すべての生活過程を、1つの要素をも見落とすことのない包括的な計算に変化させる経済的合理主義である”という Spranger (1921)の表現にも示されているように、経済的な志向性を持つ人は、不確定要素の少ない安定した環境において、最高の効率と合理性を追求することに充実感を見出すとも解釈できよう。

“美”について 教科の美術・音楽と相関が見られた。“美”の尺度項目のうち、美術のみと相関が高い項目(50)、音楽のみと相関が高い項目(38)もあるが、14、2、26は美術・音楽の両方と.20以上の相関が見られ、美術的関心と音楽的関心に共通する基盤としての“美的精神作用”を想定することには一定の意味があると考えられる。職業興味では“芸術的領域”（“編曲者”(.35)、“作曲家”(.29)、“商業デザイナー”(.29)等）、またダミー項目の“スタイリスト”(.31)とも相関があり、これらの職業興味に共通するものは、“美しく整った形にまとめ上げる”ことへの関心であると解釈できよう。

“宗教”について VPIの“芸術的領域”（“詩人”(.32)、“劇作家”(.28)等）および“黙従反応傾向”（=多くの職業に興味を示す傾向）と相関が見られた。“宗教”の項目のうち、“芸術的領域”との相関が最も高いのは項目4(.30)、“黙従反応傾向”との相関が高いのは28である(.30)。同じ“芸術的領域”への関心でも、上述の美的精神作用の場合とはやや意味合いが異なり、生きる意味の探究という宗教的・哲学的な意味で文学的職業に惹かれ、自らの運命・行く末を考える意味で職業興味全般が高いと解釈できる。なお、研究1の因子分析で、文学・言語芸術的な項目(8,44)の“宗教”への因子負荷が高かったことや、教科の国語は6精神作用の中では“宗教”との相関が高めであることも、文学的関心と宗教的志向性との関連を示唆していると言えよう。

“社会”について 教科の音楽と相関が見られた。“社会”の項目のうち、音楽と.25以上の相関があるのは29

と53（他者への援助行動に関わる項目）であり、学校教科としての“音楽”では、合奏・合唱等、助け合い協調し合うことの必要な課題が多いため、このような関連が生じた可能性もあろう。職業興味では“企業的領域”（“テレビプロデューサー”(.30)等）および“社会的領域”（“高校教師”(.36)等）と相関が見られ、他者と協力し合って1つのものを作り上げたり、他者に助力・支援することへの関心が、職業興味にも反映されると解釈できる。また“黙従反応傾向”とも相関が見られ、“黙従反応傾向”と相関が高い“社会”の項目(.25以上)は47と41であった。社会的な志向性は、他者との心の交流を求め、他者の生き方に関心を持つことを通じて、社会参加の意欲や職業興味へと発展していくと考えられる。

“権力”について VPIの“社会的領域”（“小、中学校校長”(.32)等）、“企業的領域”（“広報課長”(.34)、“司会者”(.31)等）と相関があり、160の職業中“権力”との相関が最も高いのは“セールスマン”(.35)である。権力的な志向性は、他者をリードする・説得する・誘導する等、他者に働きかけ影響力を及ぼすような職業への関心に結びつくと思われる。また“黙従反応傾向”とも相関が見られるが、Spranger (1921)によれば社会的精神作用と権力的精神作用とは、個人と社会との相互作用を前提とする点で他の4精神作用と若干区別され、人間の団結意識の二形式（同輩的形式と相互支配的形式）とされる。いずれの形式であれ、他者と連帯することに熱心であれば、他者の営為に関心を寄せ社会に目を向けることにつながり、社会参加への意欲や職業興味が高まると解釈できる。なお、“権力”と教科の好みとは全般的に相関が低い、教科学習においては既存の文化社会的価値を受容・習得することが主であり、自分の側から他者に価値を伝え影響力を及ぼそうとする権力的な志向性とは方向性が異なるためではないかとも考えられる。

結論 以上のように、6精神作用と興味関心の対象との間には有意味な関連が見られ、教科の好みや職業興味の背後にどのような主観的価値づけ・意味づけが働いているかについて、いくつかの示唆が得られた。

全体的考察

本研究では Spranger の理論に基づき、6精神作用を測定する“価値志向的精神作用尺度”が作成された。項目作成にあたっては体験者の実感に即した表現を心がけたが、“美”“宗教”等、内容が特に抽象的なものについては、一般的な意味の通じ易さを優先し、価値体験よりはむしろ価値対象に関わるような語を一部用

いている(14, 38, 16等)。また“経済”については、価値対象との関連が全体に弱く、測定しているレベルが他の5尺度と若干異なる可能性もあり、高次の精神作用を測るものとして妥当かどうか、再検討の余地がある。このようになお問題点は残るものの、主観的価値づけ・意義づけという曖昧で捉えがたい心的過程に関する指標が得られ、操作的定義が可能になったことは、1つの成果と言えよう。また、同一の教科・職業領域が複数の精神作用と関連し得るとの結果(教科の音楽と“美”“社会”、“芸術的領域”と“宗教”“美”等)が示すように、対象は同一でも、価値体験の内容は多様であり得る。その人がその対象に、なぜ・どのように惹かれるのかを理解する上でも、本尺度は有用な情報をもたらすと考えられる。

6精神作用とは主観的・内面的過程に関する概念であるだけに、より客観的・実体的な諸指標と関連づけて捉えることが欠かせない。本研究では6精神作用と興味関心の対象との関連を検討したが、これとは異なる方向性として、6精神作用がいかなる認知的機構に依存しているかという問題設定も可能であろう。例えば伊田・坂野(1988)は、神経心理学的な基礎に立脚しつつ、分析性・抽象性の高い“思索家型”と、印象性・想像性の高い“芸術家型”という2種の認知様式を想定しているが、前者は理論的精神作用と、後者は美的精神作用と、それぞれ関連があるのではないかと推測される。精神活動の基底にある認知的機構が、日常の様々な行動へと結びつく経路を明らかにする上でも、そこに介在するものとしての主観的価値づけ・意義づけのプロセスに着目することは有意義と思われ、6精神作用と、様々な認知的・行動的指標との関連を明らかにしていくことは、今後とも重要であろう。

6精神作用の枠組みは、幅広い現象に適用可能と考えられる反面、例えば“理論的精神作用”として了解し得る心的過程は無数に存在するため、何がその本質・中核であるのかが見失われやすい面がある。Spranger(1921)は、例えば理論的精神作用の記述においては、他の5精神作用との接点や対立点を示すことを通じて、他のいずれとも区別されるものとしての理論的精神作用の本質を際立たせる、という手法を用いている。ここにも示されているように、各精神作用の本質を明らかにすることと、それらの相互的關係を明らかにすることとは、表裏一体の關係にある。例えば今回作成した6下位尺度を用いて個々人のプロフィールを描き、個人内・個人間における価値と価値との対比・矛盾・葛藤の様相を記述するような研究を通じて、各

精神作用の本質へと焦点を絞り込み、本尺度の信頼性・妥当性をさらに高めていくことが望まれる。

引用文献

- Allport, G.W. 1937 *Personality : A psychological interpretations*. New York : Henry Holt and Company. (オールポート G.W. 詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀 正(訳) 1982 パーソナリティ：心理学的解釈 新曜社)
- Allport, G.W., Vernon, P.E., & Lindzey, G. 1951 *Study of values : A scale for measuring the dominant interests in personality*. Boston : Houghton Mifflin.
- Hermans, H.J.M. 1987 Self as an organized system of valuations : Toward a dialogue with the person. *Journal of Counseling psychology*, 34, 10—19.
- Howard, G.S. 1985 The role of values in the science of psychology. *American Psychologist*, 40, 255—265.
- 伊田行秀・坂野 登 1988 思索・芸術家型認知様式質問紙作成の試み 教育心理学研究, 36, 51—56.
- 伊藤美奈子・瀧野揚三・白井利明・秋葉英則・鳥山平三・曾我祥子・栃尾順子・中村淳子・橋本茂美 1995 オールポート・ヴァーノン価値テストと生活意識の関連の分析—進路指導との関連から— 大阪教育大学紀要第V部門, 43, 187—201.
- 日本労働研究機構 1985 VPI職業興味検査 雇用問題研究会
- 酒井恵子 1995a 価値追求の精神作用の測定(1) 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 89.
- 酒井恵子 1995b 研究者の心的連関に焦点を当てたデータ分析 東京大学大学院教育学研究科紀要, 35, 197—212.
- Spranger, E. 1921 *Lebensformen : Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit*. 2. Aufl. Tübingen : Max Niemeyer Verlag. (シュプランガー 伊勢田耀子訳 1961 文化と性格の諸類型 明治図書)
- 塚田 毅 1980 人格心理学概説 共立出版
- 津留 宏・秋葉英則・原谷達夫・野辺地正之・関 崎一・八重島健二 1975 現代青年の価値観と生活意識 依田 新(編) 現代青年の生態—青年心理学研究II— 金子書房 Pp. 31—58.
- Vernon, P.E., & Allport, G.W. 1931 A test for

personal values. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **26**, 231—248.

付 記

本研究の一部は、日本心理学会第 60 回大会において発表された。

本論文の作成にあたり御指導下さいました東京大学助教授市川伸一先生に厚く御礼申し上げます。また、尺度項目の作成にあたり貴重な御助言を下さいました、本研究の被験者であると同時に共同研究者とも言うべき皆様方に、深く感謝いたします。

(1996.11.15 受稿, '97. 6.9 受理)